特集「日本観」を問いなおす

# コッコジ（韓国いけ花）草創期にみる日本人観

小林善帆

## Ⅰ　はじめに

朝鮮戦争（1950 ～ 1953 年）後の韓国社会において，帝国日本の植民地時代や光復[1]後いけ花を習得した，韓国人女性たちにより，近代日本のいけ花[2]を意識しつつも朝鮮挿花文化の伝統を再認識し，つくられた韓国の「華藝[3]」文化がある。この少なくとも外見上「いけ花」に似る存在は，コッコジ[4]とよばれ，多くの韓国人女性に支持され流行し，韓国社会に一定の定着をみた。

今日，韓国の学会誌[5]や大学院修士課程の学位論文において，コッコジが取り上げられることがあるが，それはデザイン，園芸，福祉といった観点からである。いっぽう日本においては，その存在自体ほとんど知られることはないといえよう。そして，いけ花が出発点であろうコッコジの草創期は，あいまいにされたままである。

近代の日本社会において，いけ花は茶の湯とともに女性が嗜むものと位置づけられ，高等女学校・女学校においても学科目外，放課後にではあるものの設置されることが多くあった[6]。帝国日本の植民地朝鮮[7]（1910 ～ 1945）においても，宗主国日本の女性を表象するものとして，いけ花は茶の湯[8]とともにあり，同地の朝鮮人を対象とする高等女学校・女学校[9]においては，日本人女性としてあるために教えられた。

日本人としての生活を余儀なくされた朝鮮人の目に，いけ花，ひいては日本人はどのように映ったのであろうか。コッコジの草創期には，朝鮮（韓国）人女性が見聞きしあるいは体験したいけ花が再現された部分があると思われ，そこから韓国人が抱いた日本人観が見出せると考える。

以上のことから本稿はまず，コッコジ草創期の様相を，当該期のコッコジに関する記事が掲載された『女苑』[10]を中心に，『新家庭』[11]の記事を考え合わせ，いわば当時の 2 大女性雑誌から検討する。次に，コッコジを牽引した人物について明らかにし，コッコジのありよう，ひいては韓国人が描いた日本人観を考える。

## Ⅱ　女性雑誌にみるコッコジの様相

### 1.『女苑』

まず，『女苑』[12]におけるコッコジに関する記事を検討する。『女苑』にコッコジの記事が掲載されたのは，1958 年 11 月号からであった（以下【表 1】参照）。それは女苑社が 1958 年 11 月号に，任華公（イムファゴン）を講師に「実習其他経費一切本社負担」という，無料講習会

の案内記事【資料1】を以下のように掲載したことに始まる。「持参品」は「ノート，鉛筆」のみであった。翌月から同氏の紙上講座「今月のコッコジ」が始まった。

【図1】『女苑』1962年5月号
表紙（カラー），ハングル

ちまたに響く騒音と，ごみが吹きまくる中で，一日中疲れに追われ家に帰るころは，心身がぐったりと疲れきるのが常です。沈鬱な気分で部屋に入ったとき，テーブルの上に置かれた花瓶にいけている，生き生きとして清らかな花を眺めるとき，こぢんまりした雰囲気に無言の慰めを感じながら，しんみりとした情緒に染み込んでいきます。花を愛する気持ち，花から受けるこのような慰めは，誰もが経験することですが，朝生き生きとしていた花が，夕べにはしぼんでしまったという軽い失望を感じたことはなかったでしょうか。こんなことはコッコジに対する知識が少しでもあるなら，手安く解決できるはずと思っているため，このたび当社において「事業部」新設記念に，次のように無料コッコジ講習会を毎月定期的に開催するようになりました。

皆さまの多くの聴講があらんことを望みます。（以上，日本語訳）

本社主催 꽃꽂이（挿花）無料講習会

第一回は十月十五日

講師 任華公 先生

거리마다 울리는 소음과 흩날리는 먼지 속에서 온종일 고된 일에 시달려 집으로 돌아올 무렵에는 심신이 두루 지쳐 있을 때가 많습니다。 칠울한 기분으로 방안에 들어와서 「테이블」위에 놓인 화병에 꽂혀 있는 몇떨기의 싱싱하고 청아한 꽃을 바라 보면 아늑한 분위기에 무언의 위안을 느끼며 마음 호뭇한 정서에 젖어듭니다。 꽃을 사랑하는 마음、꽃으로부터 얻는 이러한 위안은 누구나 경험하는 것입니다마는、 아침에 싱싱하던 꽃이 저녁이면 시들어 버려서 가벼운 실망을 느끼신 일은 혹시 없으십니까? 이러한 일은 꽃꽂이에 대한 지식이 조금만 있어도 쉽게 해결될 수 있을 것으로 여겨지는 바 이번에 본사에서는「事業部」신설 기념으로 다음과 같이 無料 꽃꽂이 講習會를 매월 정기적으로 개최하기로 되었읍니다。 여러분들의 많은 청강이 있으시기를 바랍니다。

記

一、時日……十月十五日(水) 下午一時
二、場所……서울牛乳同業組合三層홀(貞洞敎會·法院앞)
三、講師……任華公 先生〈京畿高女卒業 서기一九四一一一九四三年까지 池坊家元)個人師事 이께노보오 이에모도
四、受講申請……受講을 원하시는 분은 전화 또는 엽서로 十月十四일안으로 姓名、年令、住所、未婚 旣婚등을 本社에 통지할 것。
五、持參品……노-트、연필
※實習 其他經費一切本社負擔

【資料1】『女苑』1958年11月号　コッコジ無料講習会の記事

表１ 『女苑』コッコジ記事一覧（1958 年～ 1962 年）

| 掲載年月 | タイトル | ページ | 筆者 |
|---|---|---|---|
| 1958. 11 月 | 広告꽃꽂이（コッコジ）<br>無料講習会案内 | 127 | （記者による記事） |
| 1958. 12 月 | 12 月의 꽃꽂이<br>（12 月のコッコジ） | 287 ～ 288 | 任 華 公 |
| 1959. 1 月 | 正月의 꽃꽂이 | 251 ～ 253 | 任 華 公 |
| 1959. 2 月 | 二月의 꽃꽂이 | 281 ～ 283 | 任 華 公 |
| 1959. 3 月 | 三月의 꽃꽂이 | 280 ～ 282 | 任 華 公 |
| 1959. 4 月 | 四月의 꽃꽂이 | 278 ～ 279 | 任 華 公 |
| 1959. 5 月 | 五月의 꽃꽂이 | 226 ～ 227 | 任 華 公 |
| 1959. 6 月 | 六月의 꽃꽂이 | 232 ～ 234 | 任 華 公 |
| 1959. 7 月 | 이달의 꽃꽂이<br>（今月のコッコジ） | 223 ～ 225 | 任 華 公 |
| 1959. 8 月 | 이달의 꽃꽂이 | 231 ～ 233 | 任 華 公 |
| 1959. 9 月 | 이달의 꽃꽂이 | 232 ～ 234 | 任 華 公 |
| 1959. 10 月 | 十月의 꽃꽂이 | 282 ～ 284 | 任 華 公 |
| 1959. 11 月 | 十一月의 꽃꽂이 | 266 ～ 268 | 任 華 公 |
| 1959. 12 月 | 十二月의 꽃꽂이 | 272 ～ 274 | 任 華 公 |
| 1960. 1 月 | 一月의 꽃꽂이 | 268 ～ 270 | 任 華 公 |
| 1960. 2 月 | 二月의 꽃꽂이 | 267 ～ 269 | 任 華 公 |
| 1960. 3 月 | 三月의 꽃꽂이 | 268 ～ 270 | 任 華 公 |
| 1960. 4 月 | 四月의 꽃꽂이 | 254 ～ 256 | 任 華 公 |
| 1960. 5 月 | 五月의 꽃꽂이 | 254 ～ 256 | 任 華 公 |
| 1960. 6 月 | 六月의 꽃꽂이 | 254 ～ 256 | 任 華 公 |
| 1960. 7 月 | 七月의 꽃꽂이 | 267 ～ 266 | 任 華 公 |
| 1960. 8 月：なし | | | |
| 1960. 9 月 | 이달의 꽃꽂이<br>（今月のコッコジ） | 340 ～ 342 | 高 霞 水 |
| 1960. 10 月 | 이달의 꽃꽂이 | 340 ～ 343 | 高 霞 水 |
| 1960. 11 月 | 이달의 꽃꽂이 | 351 ～ 353 | 高 霞 水 |
| 1960. 12 月 | 이달의 꽃꽂이 | 354 ～ 356 | 高 霞 水 |
| 1961. 1 月 | 이달의 꽃꽂이 | 315 ～ 317 | 高 霞 水 |
| 1961. 2 月 | 이달의 꽃꽂이 | 364 ～ 366 | 高 霞 水 |
| 1961. 3 月 | 이달의 꽃꽂이 | 308 ～ 310 | 高 霞 水 |
| 1961. 4 月 | 이달의 꽃꽂이 | 354 ～ 356 | 高 霞 水 |
| 1961. 5 月 | 五月의 꽃꽂이 | 358 ～ 361 | 高 霞 水 |
| 1961. 6 月 | 이달의 꽃꽂이 | 307 ～ 309 | 高 霞 水 |
| 1961. 7 月 | 이달의 꽃꽂이 | 295 ～ 297 | 高 霞 水 |
| 1961. 8 月 | 꽃꽂이의 線과 뭉치<br>（コッコジの線とかたまり） | 341 ～ 343 | 高 霞 水 |
| 1961. 9 月 | 이달의 꽃꽂이<br>（今月のコッコジ） | 338 ～ 340 | 高 霞 水 |
| 1961. 10 月 | 이달의 꽃꽂이 | 344 ～ 346 | 高 霞 水 |
| 1961. 11 月 | 이달의 꽃꽂이 | 328 ～ 330 | 高 霞 水 |
| 1961. 12 月 | 이달의 꽃꽂이 | 184 ～ 186 | 高 霞 水 |
| 1962. 1 月～ 1962. 3 月：なし。　ただし 1962. 3 月は「造花つくり」の記事掲載 | | | |
| 1962. 4 月 | 이달의 꽃꽂이 | 314 ～ 315 | 嶋元恵美子 |
| 1962. 5 月 | 이달의 꽃꽂이 | 320 ～ 321 | 嶋元恵美子 |
| 1962. 6 月 | 이달의 꽃꽂이 | 285 ～ 287 | 嶋元恵美子 |
| 1962. 7 月 | 이달의 꽃꽂이 | 322 ～ 323 | 金仁順・朴松薫 |
| 1962. 8 月 | 이달의 꽃꽂이 | 306 ～ 307 | 嶋元恵美子 |

＊（）内に適宜、日本語訳を施した。

この案内記事からコッコジ講座の目的が，日本のいけ花が持つ礼儀作法の修得という理由ではなく，草花に癒しを求め，その扱い方を学ぶという内容であることがわかる。そのいっぽうで女苑社の事業拡張に伴い，流行の兆しのあるコッコジを掲載すれば，『女苑』の販売部数が伸びるという企画であったと考える。

以後，紙上で任華公の講座が同年12月号から1960年7月号まで，およそ1年半掲載された。次に1か月空けて高霞水（コハス）の講座が1960年9月号から1961年12月号まで，同様に1年半掲載された。次に3か月空けて日本人・嶋元恵美子[13]の講座が1962年4月号から4回掲載されたが，1962年8月号で講座は打ち切りとなっている。この間7月号講座のみ，金仁順[14]と朴松薫が担当したが，これまでにない造形的な作品が載せられた。

この1958年10月に始まる女苑社による無料講習会，ならびに以後の一連の紙上講座は，コッコジの成立にとって大きな出来事であったと考えられる。なぜなら，任華公が具体的な教授活動をはじめたのが1958年7月，また高霞水は1956年に霞水会を創立したといい，（任華公，高霞水については次章に詳しい。）『女苑』はこのまだそれほど知られることのなかったコッコジの存在を，韓国全土の不特定多数の読者へ発信，さらに紙上講座により，具体的にそのありようを伝えたといえるからである。同社はその後も女性を対象にコッコジ講座や料理講座を開催している。

留意したいのは，11月号の無料講習会見出し（【資料1】）のコッコジを括弧書きで「挿花」としているものの，コッコジ紙上講座では任華公の所属先を「東和百貨店　生花部　生花家」[15]，高霞水を「生花家」[16]というように「センファ（生花）」と発音するとはいえ，「生花（いけ花）」と何度も記されたことである。

また，この講座を担った3人の履歴[17]には，日本の流派のいけ花を修得（習得）したことと，任華公・嶋元恵美子は京城（現在のソウル）の名門高等女学校卒業，高霞水については最終学歴の日本の短期大学名が記された。高霞水も植民地期朝鮮時代に難関の高等女学校を卒業している。ここで日本のいけ花を修得していることを明記したことは，コッコジの教授がいけ花の習得によるものであることを明記したことになる。次に高等女学校卒業という履歴は，近代日本社会において女性の最高学歴と言って過言ではなかった。まして韓国人にとって，帝国日本の高等女学校に入学できたのは学力，家の経済力，親の社会的地位など，その多くが揃ったいわばほんの一握りの存在といえた。それゆえこの学歴の明記は，コッコジの付加価値を高めるものであるとともに，一面において植民地時代の日本社会のありようを引きずるものであった。

先の「生花」の記述といい，このような日本を良く知る人物であるという履歴は，コッコジを牽引するものとして，むしろ相応しいと捉えられた感がある。しかし，そのいっぽうで嶋元恵美子の講座が短期間打ち切りになったことにみられるように，反日感情が強くあったことも事実であった。

以下，講座内容をみていく。

①　任華公の場合

毎回，2～3作品の花の挿し方を解説。冒頭に今回の花材についての話があり，次に⑴メッセージ　⑵花材と用具　⑶花材を挿す要領　⑷置き場所の4点について述べている。

一例として1959年2月のコッコジについてみてみる。この回は椿の作品と，猫柳（ねこやなぎ）

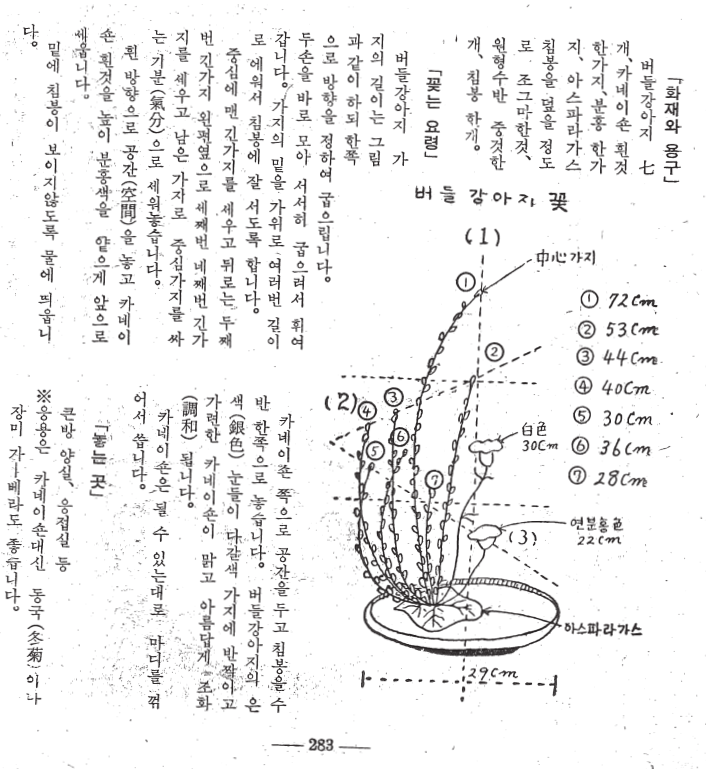
の作品の２作品であった。以下，猫柳の作品をみる（【資料２】参照）。

⑴　メッセージ：新しく芽を吹く春を，寒いながら部屋の中で迎えたいと思います。

⑵　花材と用具：猫柳の枝７つ，カーネーション白色１枝，桃色１枝，アスパラガス・剣山を覆う程度の小さいもの。円形水盤（花器）中くらいの１つ。剣山１つ。

⑶　挿す要領：猫柳の枝の長さは絵のようにして，一方の方に方向をきめて曲げます。両手をまっすぐに合わせ，徐々に曲げていきます。枝の下をはさみでたくさんの芽のわたを取り除き，剣山によく立つようにします。／中心に一番長い枝を立て，うしろに二番目の長い枝，右側の方に三つ目の，四つ目の長い枝を立て，残りの枝で中心の枝を包む気分で立てておきます。／まがった方面に空間を置き，カーネーションの白いものを高く，桃色のものを低く立てます。／下の方の剣山が見えないように，アスパラガスを水に浮かべます。／カーネーションの方に空間を置き，剣山を水盤方寄りに置きます。猫柳の銀色の芽が茶褐色の枝に輝き，可憐なカーネーションが美しく澄んだ調和を見せます。／カーネーションはなるべく節を折って使います。

⑷　置き場所：大部屋，洋室，応接間等。※応用には，カーネーションの代わりに冬菊とかバラ，ガーベラもかまいません。（以上，日本語訳。括弧入り数字番号，改行をあらわす／は，筆者の加筆）




【資料２】『女苑』1959年２月号　任華公「２月のコッコジ」の日本語訳の部分

いけ花と異なる点は，基本的な決められた型がなく，自らが考えた実際の花材の扱い方と，形の作り方を説明していること。いけ花と同様（以下,筆者による傍線部の部分参照）なのは剣山，水盤という，いけ花の用具，また剣山の隠し方，水盤の中の配置のし方であり，いわば外見は同じである。(括弧入り数字，記号は読みやすさを図るため，筆者が加筆)

② 高霞水のコッコジ

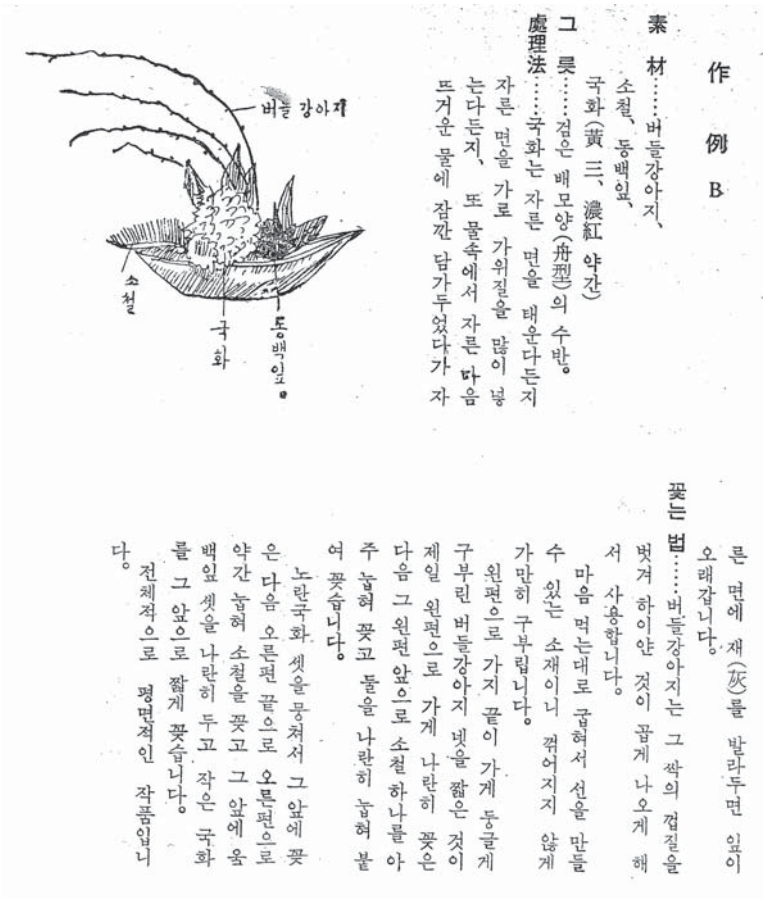
毎回，3作品前後の花の挿し方を教える。冒頭に今回の花材についての話があり，次に (1)素材（花材） (2)花器 (3)処理法 (4)挿す方法の4点について述べている。

ここでは一例として，1961年1月号のコッコジについてみていく。この回は，つた蔓とキンセンカ，菊の作品と，猫柳と蘇鉄，菊の2作品であった。任華公と同じ花材を扱ったものとして，以下，猫柳の作品（「作例」B）をみる（【資料3】参照)。

(1) 素材（花材）：猫柳の花，蘇鉄，冬椿の葉，菊（黄色3，濃紅少し）

(2) 花器：黒い舟型の水盤

(3) 処理法：菊は切り口を焼いたり，切り口を横に挟み切りして，水に浸したり，また水




【資料3】『女苑』1961年1月号　高霞水「1月のコッコジ」の日本語訳の部分

の中で切った後，熱い湯にしばらく浸した後，切り口に灰をぬっておいたら，葉が長持ちします。

(4) 挿す方法：猫柳は，その芽の皮をはがして白い面がきれいに剥けたら使います。／意のままに曲げて線が作れる素材ですから，折れないようにやさしく曲げます。／左側に枝の先が行くように丸くまげた猫柳 4 本を，短いのが一番左の方に行くように揃えて挿した後，その左側前に蘇鉄一つを横に寝かしてさし，二つを寝かせ近づけてさします。／黄色い菊 3 つを固めてその前に挿して，次に右側の先に右側に少し寝かせて蘇鉄をさし，その前に冬椿の葉 3 つを揃えて並べ，小さい菊を前の方に短く挿します。／全体的に平面的な作品です。（以上，日本語訳。括弧入り数字番号，改行をあらわす／は，筆者の加筆）

両者の作品から，任華公は常に置く場所を明記したが，高霞水は記していない，しかし任華公が記さなかった花材の処理法（水の揚げかた）を，高霞水は毎回記している。任華公は作品を含めた空間を大切にし，高霞水は作品そのものに視点を置いているという違いはあるが，それは本質をつく問題ではない。

留意すべきことは両者ともに，いけ花のように，伝えられてきた型に当てはめるような方法では教えていないということである。両者はただ，自分の挿し方を教えている。決められた型を持たず，許状，免状という考えも見当たらない。家元制度によらないありようは，コッコジの特徴といえる。

③ 嶋元恵美子のコッコジ

先の両者は，自らが学んだ日本の流派のいけ花，型として教えておらず，自身のコッコジとして教えている。日本人である嶋元恵美子の場合はどうか。

嶋元の第一回講座が掲載された 1962 年 4 月号は，「この作品では，わが国の瓢箪ふくべを使いました。」と述べ，日本の瓢箪の花器の使用が強調されて模範作品が作られた。また日本のいけ花の役枝名称, 位置関係等を使用して解説している（【資料 4】参照）。日本のいけ花としてコッコジ講座を担当していることが注目される。しかし流派名は出していない。嶋元の講座が 4 回で打ち切られたのは，コッコジと記しながらも内容が，明らかに日本のいけ花として教えられた[18] ことによるものと思われる。

以後, 3 か月を空けて 1962 年 12 月から, 再びコッコジが取り上げられるようになる（以下【表 2】参照）。まず先に一度登場した研美会の金仁順，さらにコッコジを学ぶ政財界の夫人たちの作品が取り上げられている。作品にはコッコジ研究家の批評（「評」）が付けられた。ここからはコッコジが上流階級の趣味であることが印象づけられたであろう[19]。

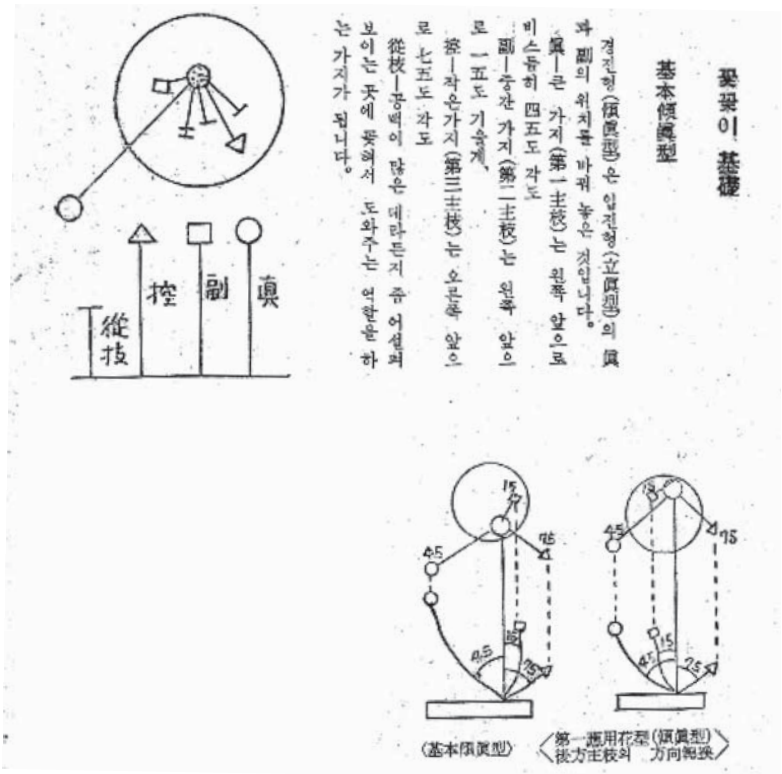
またコッコジ研究家を名乗る者により会が結成され，霞水会（会長：高霞水）はもとより任華公コッコジ同友会（会長：任華公），研美会（会長：金仁順），雅歌会（会長：洪淑華），真善美会（会長:金苑廷），趙在仙コッコジ研究会（会長:趙在仙）等が結成された。留意したいのは，日本のような家元制度に基づく「流派」ではなく，「会」（集まり）であったことである。

さらに 1966 年，韓国コッコジ協会[20]（初代会長：金仁順，同副会長：洪淑華・金苑廷）が設

表2 『女苑』コッコジ記事一覧（1962年～1967年）

| 掲載年月 | タイトル | ページ | 筆者 |
|---|---|---|---|
| 1962. 9月～1962. 11月：なし | | | |
| 1962. 12月 | 食卓을 위한 꽃꽂이<br>(食卓のためのコッコジ) | 382～384 | 김인순（金仁順）・전은옥・<br>오인숙　研美会員 |
| 1963. 1月～1963. 2月：なし | | | |
| 1963. 3月 | 早春의 꽃꽂이 | 378～380 | 尹得漢 꽃꽂이研究家 |
| 1963. 4月～1963. 11月：なし | | | |
| 1963. 12月 | 63年 꽃꽂이의　決算<br>―研美會展에서― | 338～339 | 리틀・김인순（金仁順）・<br>유성천・김숙자 |
| 1964. 1月～1964. 6月：なし | | | |
| 1964. 7月 | 研美會꽃꽂이展 | 358～359 | 金仁順 研美会長 |
| | （コッコジと料理無料講習会）<br>女苑社の講習会のお知らせ | 343 | コッコジ講師：任華公 |
| 1964. 8月～1965. 2月：なし | | | |
| 1965. 3月 | 3月의 꽃꽂이 | 357～358 | 任華公 |
| 1965. 4月 | 四月의 꽃꽂이 | 344～345 | 任華公 |
| 1965. 5月 | 우리집의 꽃꽂이<br>(我が家のコッコジ) | 356～357 | 李弼順 新世界社長夫人<br>評：任華公 |
| 1965. 6月 | 우리집의 꽃꽂이② | 354～355 | 趙英淑 中小企業銀行長夫人<br>評：金仁順 |
| 1965. 7月 | 우리집의 꽃꽂이③ | 352～353 | 南鮮祐 大韓石油公社社長夫人<br>評：任華公 |
| 1965. 8月 | 우리집의 꽃꽂이 | 370～371 | 鄭充熙 青瓦臺秘書室長夫人<br>評：金仁順 |
| 1965. 9月 | 꽃을 꽂는 마음　（花を挿す心） | 56～57 | 洪淑華 |
| | （コラム）<br>省墓할 때 꽃다발을<br>（墓参りのとき花束を） | 420～421 | 任華公 |
| 1965. 10月 | 꽃꽂이 巡礼②꽃을 꽂는 마음 | 72～73 | 오인숙 |
| 1965. 11月 | 꽃꽂이 巡礼③꽃을 꽂는 마음 | 80～81 | 김진화 |
| 1965. 12月 | 꽃꽂이 巡礼④꽃을 꽂는 마음 | 落丁（ページと筆者は確認できない） | |
| 1966. 1月 | 正月을 위한 꽃꽂이 | 19～21 | 任華公 |
| 1966. 2月 | 꽃꽂이 巡礼　꽃을 꽂는 마음 | 58～59 | 金苑廷 |
| 1966. 3月：なし | | | |
| 1966. 4月：別冊附録に「원예와 꽃꽂이（園芸とコッコジ）」 | | | |
| 1966. 5月～1966. 8月：なし | | | |
| 1966. 9月 | (取材記事)<br>韓國 꽃꽂이 協會의 創立 | 284～285 | 韓国コッコジ協会会長<br>金仁順インタービュー |
| | | 285 | 洪淑華女史와　雅歌會 |
| 1966. 10月 | 女苑家政学園十月中講座一覧 | 350～351 | |
| 1966. 11月～1966. 12月：なし | | | |
| 1967. 1月 | 正月의 꽃꽂이 | 371 | 任華公 |
| 1967. 2月 | 2月의 꽃꽂이　窓가의 対話<br>（窓辺の対話） | 371 | 洪淑華 |
| 1967. 3月 | 3月의 꽃꽂이　봄이여 어서오라<br>（春よ早くきて） | 371 | 高霞水 |
| 1967. 4月 | 食卓의 꽃꽂이 해피・버즈데이<br>（ハッピーバースデー） | 375 | 李相金（後に韓国コッ芸術作家協会第三代理事長歴任） |
| 1967. 5月：なし | | | |
| 1967. 6月 | 이달의 꽃꽂이 戰場과 꽃<br>（戦場と花） | 272～273 | 金倫田 任華公꽃꽂이<br>同友会副会長 |
| 1967. 7月 | 이달의 꽃꽂이<br>空間에 메아리지는 꽃의 合唱<br>(空間にこだまする花の合唱) | 243～245 | 金晴明 霞水会꽃꽂이講師 |
| 1967. 8月 | 이달의 꽃꽂이<br>여름의 한낮, 꽃과 물의 속삭임<br>(夏の真昼、花と水のささやき) | 247～248 | 趙在仙 趙在仙꽃꽂이研究会長 |
| 1967. 9月 | 새로운 꽃꽂이（新しいコッコジ）<br>플라워 디자인（フラワーデザイン） | 251～152 | 金貞子 |
| 1967. 10月 | ＜女流名士　50人의 人生과 名言＞<br>健全한　精神은 | 134 | 任華公 |
| 1967. 11月、12月：なし | | | |

＊（）内に適宜、日本語訳等を施した。




【資料 4】『女苑』1962 年 6 月号　嶋元恵美子「今月のコッコジ」の解説部分

立された。コッコジの専門家や団体が『女苑』というメディアに登場したことから，これら一連の動きもまた韓国全土の不特定多数の読者に発信されたといえよう。

先の 1958 年に始められた無料講習会からおよそ 10 年の時を経て，コッコジ熱の高まりがわかるとともに，コッコジは，1968 年ころには確実に韓国社会に根付き始めていた。そこに韓国の高度成長期による経済的ゆとりが拍車をかけ，コッコジはさらに流行していったといえよう。

**2.** 『새가정 **(新家庭)**』

次に『新家庭』（以下【表 3】参照）であるが，同誌では 1964 年 2 月号からコッコジ作品の掲載が始まっている。当初は李仁徳[21]（尚美コッコジ会主宰）の作品が掲載され，やがて尚美コッコジ会会員の作品も掲載されるようになり，コッコジの広まりが感じられる。しかしやはりコッコジの内容は，任華公や高霞水と同様，日本のいけ花のように，決められた型にそって学んでいくものではなく，自らの花の挿し方を説明するものである。

さらに留意するのは，1968 年度掲載作品から，コッコジにテーマが付けられていることである。『女苑』（【表 2】）においても，ほぼ同時期の 1967 年 2 月号から，作品にテーマが付けられている。近代いけ花には管見の限りテーマをつけるということはなく，現代いけ花では，場合によっては付けることもないわけではないが一般的ではない。なぜなら，いけ花は基本的には型（形）の修得であり，テーマを以っていけ花を作るという作業は取り立てて必要ないからである。

表3 『새가정（新家庭）』コッコジの掲載一覧（1964年～1976年）

| 掲載年月 | タイトル | ページ | 筆者 |
|---|---|---|---|
| 1964. 2月 | 이른 봄의 꽃꽂이（早春のコッコジ） | 106-109 | 권현숙 |
| 1964. 4月 | 4월의 꽃꽂이（四月のコッコジ） | 100-101 | 권현숙 |
| 1968. 7月 | 차와 휴식（お茶と休息） | 29 | 李仁徳 |
| 1968. 10月 | 10월의 꽃꽂이 – 만추（晩秋） | 132 | 李仁徳 |
| 1968. 11月 | 11월의 꽃꽂이 – 기다림（待つこと） | 132 | 李仁徳 |
| 1968. 12月 | 이달의 꽃꽂이（今月のコッコジ）– 성탄절（聖誕祭） | 108 | 李仁徳 |
| 1969. 1月 | 이달의 꽃꽂이 – 출범（出帆） | 86, 108 | 李仁徳 |
| 1969. 2月 | 이달의 꽃꽂이 – 미래상（未来像） | 125, 150 | 李仁徳 |
| 1969. 3月 | 이달의 꽃꽂이 - 봄의 소리（春の音） | 8, 150 | 李仁徳 |
| 1969. 4月 | 이달의 꽃꽂이 – 신화（神話） | 8 | 李仁徳 |
| 1969. 5月 | 이달의 꽃꽂이 – 모정（母情） | 57 | 李仁徳 |
| 1969. 6月 | 이달의 꽃꽂이 – 믿음（信頼） | 8 | 李仁徳 |
| 1969. 7月 | 이달의 꽃꽂이 – 초하（初夏） | 8 | 李仁徳 |
| 1969. 8・9月 | 이달의 꽃꽂이 – 사색（思索） | 58 | 李仁徳 |
| | 〔コラム〕（美的見地から見たコッコジ） | 99 | 李仁徳 |
| 1969. 10月 | 이달의 꽃꽂이 – 흑백（黒白） | 8 | 李仁徳 |
| 1969. 11月 | 이달의 꽃꽂이 – 연정（恋情） | 8 | 李仁徳 |
| 1969. 12月 | 이달의 꽃꽂이 – 성탄절（聖誕祭） | 8 | 李仁徳 |
| 1970. 1月 | 이달의 꽃꽂이 – 신정（新正） | 8 | 李仁徳 |
| 1970. 2月 | 이달의 꽃꽂이 – 소망（希望） | 8 | 李仁徳 |
| 1970. 3月 | 이달의 꽃꽂이 - 봄의 소리（春の音） | 8 | 李仁徳 |
| 1970. 4月 | 이달의 꽃꽂이 - 봄의 찬가（春の賛歌） | 8 | 李仁徳 |
| 1970. 5月 | 이달의 꽃꽂이 – 계절의찬가（季節の賛歌） | 8 | 李仁徳 |
| 1970. 6月 | 이달의 꽃꽂이 – 첫여름（初夏） | 8 | 李仁徳 |
| 1970. 7月 | 이달의 꽃꽂이 – 밤（夜） | 8 | 李仁徳 |
| 1970. 8・9月 | 이달의 꽃꽂이 – 정（情） | 8 | 李仁徳 |
| 1970. 10月 | 이달의 꽃꽂이 – 가을（秋） | 8 | 李仁徳 |
| 1970. 11月 | 이달의 꽃꽂이 – 추정（秋情） | 8 | 李仁徳 |
| 1970. 12月 | 이달의 꽃꽂이 – 크리스마스 이브（クリスマスイブ） | 8 | 李仁徳 |
| 1971. 1月 | 이달의 꽃꽂이 – 출발（出発） | 8 | 李仁徳 |
| 1971. 2月 | 이달의 꽃꽂이 – 축복（祝福） | 8 | 李仁徳 |
| | 〔コラム〕（現代人のコッコジ） | 116-118 | 李仁徳 |
| 1971. 3月 | 이달의 꽃꽂이 - 早春想） | 8 | 이준실／解説 李仁徳 |
| 1971. 4月 | 이달의 꽃꽂이 – 훈풍（薫風） | 8 | 李仁徳 |
| 1971. 5月 | 이달의 꽃꽂이 – 모정（母情） | 8 | 이신자／解説 李仁徳 |
| 1971. 6月 | 이달의 꽃꽂이 – 산길（山道） | 8 | 李仁徳 |
| 1971. 7月 | 이달의 꽃꽂이 – 휴가（休暇） | 8 | 이경표（尚美꽃꽂이회원） |
| 1971. 8・9月 | 이달의 꽃꽂이 – 태양（太陽） | 7 | 李仁徳 |
| 1971. 10月 | 이달의 꽃꽂이 – 가을（秋） | 8 | 전영숙（尚美꽃꽂이회원） |
| 1971. 11月 | 이달의 꽃꽂이 – 첫눈（初雪） | 8 | 李仁徳 |
| 1971. 12月 | 이달의 꽃꽂이 – 한국의 아침（韓国の朝） | 8 | 전성결（尚美꽃꽂이회원） |
| 1972. 1月 | 이달의 꽃꽂이 – 새해（新年） | 55 | 李仁徳 |
| 1972. 2月 | 이달의 꽃꽂이 – 축복의 날（祝福の日） | 5 | 李仁徳 |
| 1972. 3月 | 이달의 꽃꽂이 – 아빠의 생일（父の誕生日） | 5 | 李仁徳 |
| 1972. 4月 | 이달의 꽃꽂이 – 부활절（復活祭） | 5 | 李仁徳 |
| 1972. 5月 | 이달의 꽃꽂이 – 어머니날（母の日） | 5 | 李仁徳 |
| 1972. 6月 | 이달의 꽃꽂이 – 새마음（新しい心） | 58 | 李仁徳 |
| 1972. 7月 | 이달의 꽃꽂이 – 성하의 계절（盛夏の季節） | 57 | 李仁徳 |
| 1972. 8・9月 | 이달의 꽃꽂이 – 영원（永遠） | 8 | 장옥자（尚美꽃꽂이원） |
| 1972. 10月 | 이달의 꽃꽂이 – 추정（秋情） | 55 | 李仁徳 |
| 1972. 11月 | 이달의 꽃꽂이 – 만추（晩秋） | 5 | 李仁徳 |
| 1972. 12月 | 이달의 꽃꽂이 – 새아침（新しい朝） | 6 | 李仁徳 |
| 1973. 1月 | 이달의 꽃꽂이 – 출범（出帆 | 5 | 李仁徳 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1973. 2月 | 이달의 꽃꽂이 – 봄의 소리（春の音） | 5 | 李仁徳 |
| 1973. 3月 | 참사랑（真の愛） | 5 | 이신자／解説 李仁徳 |
| 1973. 4月 | 기다림（待つこと） | 5 | 이준실／解説 李仁徳 |
| 1973. 5月 | 봄비（春雨） | 5 | 유경자／解説 李仁徳 |
| 1973. 6月 | 첫여름（初夏） | 5 | 이경표／解説 李仁徳 |
| 1973. 7月 | 다정한 사람들（優しい人々） | 5 | 함승아／解説 李仁徳 |
| 1973. 8・9月 | 숲속의 노래（森の歌） | 7 | 李仁徳 |
| 1973. 10月 | 만추（晩秋） | 7 | 위홍전／解説 李仁徳 |
| 1973. 11月 | 행복한 약속（幸せな約束） | 7 | 엄앵란／解説 李仁徳 |
| 1973. 12月 | 성탄절（聖誕祭） | 7 | 李仁徳 |
| 1974. 1月 | 祭壇의꽃꽂이（のコッコジ） | 7 | 이경숙（雅歌会） |
| 1974. 2月 | 祭壇의꽃꽂이（のコッコジ） | 7 | 이경숙（雅歌会） |
| 1974. 3月 | 祭壇의꽃꽂이（のコッコジ） | 7 | 이경숙（雅歌会） |
| 1974. 4月 | 祭壇의꽃꽂이（のコッコジ） | 7 | 최정순（雅歌会） |
| 1974. 5月 | 祭壇의꽃꽂이（のコッコジ） | 7 | 최정순（雅歌会） |
| 1974. 6月 | 祭壇의꽃꽂이（のコッコジ） | 69 | 최정순（雅歌会） |
| 1974. 10月 | 祭壇의꽃꽂이（のコッコジ） | 7 | 한시동（華公会） |
| 1974. 11月 | 祭壇의꽃꽂이（のコッコジ） | 7 | 박남순（華公会） |
| 1974. 12月 | 祭壇의꽃꽂이（のコッコジ） | 7 | 김영숙（ヤングフラワーデザイン協会長） |
| 1975. 5月 | 〔記事〕꽃꽂이연구가 고하수씨（コッコジ研究家 高霞水氏） | 54-55 | — |
| 1975. 8・9月 | 〔コラム〕취미를 살린 부업（趣味を生かした副業） | 57-59 | 李仁徳 |
| 1976. 2月 | 〔記事〕관심 높아가는 YWCA 규수반（関心高まる YWCA 閨秀クラス） | 68-69 | — |
| 1976. 11月 | 〔記事〕이런 부업 어떨까요？꽃꽂이（このような副業どうですか。） | 134-135 | — |

＊（）内に適宜、日本語訳等を施した。

1974年から1年間（7，8，9月を除く）は，キリスト教系雑誌ならではの「祭壇のコッコジ」についても掲載され，コッコジの置かれる場所がさらに広がりを見せていることがわかる。言うまでもないが，いけ花の場合，仏前（御仏）や神前（天神）に供えるものとして発展したもので，キリスト教の祭壇に飾るという設定は原則としてなかった。

いっぽう1975年5月号は，前年，高霞水がコッコジを始めて20年目の節目に『韓国コッコジの歴史』を出版したことを受け，歴史的な考証を通じて学術的に研究した本としてコッコジ界では初めてであると紹介し，同氏に対するインタビューの内容を掲載した。同氏によれば，1970年ころから同書を手がけたといい，『女苑』と同様この頃に，コッコジが韓国社会に根付き始めたことがいえる（Ⅲ．2．高霞水参照）。

その後1975年8・9月号，1976年11月号では，コッコジを「趣味を生かした副業」「このような副業どうですか」と，コッコジを教えることを副業と捉えている。コッコジのさらなる流行が窺える。

【図2】『새가정（新家庭）』1964年1月号表紙（カラー）ハングル

## Ⅲ　コッコジの牽引

草創期のコッコジを担った者は，今日出版されているコッコジ関連出版物にある著者履歴や聞き取り調査から①植民地期朝鮮で朝鮮人女性が，高等女学校卒業後いけ花を習い，朝鮮戦争後教えた。②光復後日本に滞在，そこでいけ花を習い，韓国への帰国後教えた。③植民地期に日本に居住した朝鮮人がいけ花を習い，戦後，韓国に帰国し教えた。④朝鮮戦争後，韓国への夫（日本人）の駐在にともない，日本人女性が渡韓，いけ花を教えた。⑤朝鮮戦争後，韓国への夫（朝鮮人）の帰国にともない，日本人女性が渡韓，日本で修得していたいけ花を教えた。以上のおよそ5つのパターンに分けられる。④⑤の場合は，日本人の教えたいけ花が，韓国人にとってはコッコジととらえられたとも思われる。

ここでは草創期から今日までコッコジを牽引し続けた代表的人物として，任華公（パターン①）と高霞水（パターン②）について考える。

### 1. 任華公[22)]

1924年江原道に生まれる。祖父が四季を通して庭で草花を栽培，通信販売でタキイ種苗から花の種を取り寄せるほどという，草花のある環境で育ち，花好きになったという。高等女学校入学のため，一家でソウルに移り住んだ。

1941年，京畿公立高等女学校[23)]卒業。在学中，いけ花や茶の湯を実際に習った記憶はない。しかし学校で教えられていたのは知っていたという。卒業後2年間，池坊のいけ花を習った。先生は日本人の女性だった。正座での稽古だった。日本人に交じって習い，朝鮮人は自分だけであった。1943年19歳で結婚。1950年，朝鮮戦争で夫を失う。娘二人をつれてソウルに戻り，当時の仮住まいは日本式の家屋で床の間があった。花屋で気にいった花があれば買い込み，床の間にいける，花束にして友人に持っていく，東洋蘭[24)]を自分流にいけ，また徳寿宮の美術館の朝鮮王朝時代の絵を見て歩いた。さらに東和百貨店と新世界百貨店でフラワーショップを始めたが，うまくいかなかった。

1958年7月から韓国銀行の女子行員約50人に教え始めた。同年10月，初の個展「任華公コッコジ・生花（センファ）小品展」をアメリカ公報院で開いた。同時期『女苑』「今月のコッコジ」（紙上講座）に掲載，定期講習会の講師となり，これらのことがコッコジ作家としての出発であった。それとともにソウルに滞在する外国人にコッコジの関心が高く，外国人の弟子が多くできた。

いけ花はそれまで「センファ・生花」と呼ばれていて，講習会を開催するにあたり韓国式の名称で呼ぶ必要から，『女苑』編集部が「コッコジ」という言葉を使い始めたという。

1960年「任華公コッコジ同友会」（1973年「社団法人華公会」に改組）を創立。第1回「華公会会員展」，のちの「華公会華芸展」を開催した。1961年，陸英修女史（後の朴正熙大統領[25)]夫人）のコッコジの先生となる。1962年11月，日韓国交以前に陸英修女史の取り計らいにより，日本へいけ花留学をした。

1963年から，朴正熙大統領[26)]・大統領府（青瓦台）の花を担当するようになり，玄関，執務室，応接室，食堂などに花をいけ，それは大統領在任中の18年間に及んだ。さらに外交官夫人，在韓商社員の夫人に教えるようになった。さらに日本の主婦の友社の協力を得て，再びいけ花を

日本で学んだ。そのいっぽうで韓国においては，梨花女子大学校等で教えた。このころ子育て後の女性へのコッコジの流行があり，弟子も多くなった。外交官夫人のクラスを持ち，世界各国での展示会，デモンストレーションを行った。

1970 年，華公苑を造る。それはソウル北西の山のふもとに一万坪の土地を購入し，桜，鈴蘭，竜胆など数十種類の草花を植え，栽培を行った。1974 年，その華公苑の一隅に朝鮮伝統の白磁の窯を築き，陶工による花器の制作を行い，それを使用した。1979 年以降，個人作品集（韓国語・英語）や会員との作品集を発行[27]。1984 年「フィラデルフィア・フラワー・ショー」に出品，ライフ・メンバーになり，イタリアでの活動も行った。

2011 年まで，ウエスティン朝鮮ホテルで「（社団法人）華公会　華芸展」を年 2 回開催した。イケバナ・インターナショナル・ソウル支部に所属，駐韓外交官夫人たちの教室を開く。2015 年現在，外交官夫人の教室・展覧会のみ継続中で，コッコジの会は，すでに後継者に譲渡（韓国に家元制度はない）している。弟子たちによる教会の花[28]なども続けられている。

同氏の活動軌跡から，大統領府（青瓦台）の花を担当したこと，また白磁の花器の制作・使用をはじめとして，韓国の文化をコッコジに取り入れ，さらに海外に積極的に活動範囲を広げたことがわかる。

### 2. 高霞水[29]

1927 年，慶尚南道の宜寧に生まれた。父親は医師であった。母親はこの父との結婚のため，官立京城女子高等普通学校（後，京畿公立高等女学校）を中退したという。馬山（マサン）高等女学校を卒業，同校は日本人中心の学校で，韓国人は 8 名程度だった。「家事」の時間に料理，服装，茶道，いけ花の授業があった。しかし当時はいけ花などにはあまり興味がなかったという。

朝鮮戦争後，日本の京都外国語大学短大を卒業，日本留学中に京都や東京で池坊や草月流のいけ花も学ぶ。以後，草月流関係者との交流が続いた。帰国後，1956 年霞水コッ芸術会（霞水会）を創立。1974 年『韓国コッコジの歴史』を出版した。

以下，聞き取り調査における談話と，先のⅡ．2 に記した『新家庭』1975 年 5 月号の記事から，同氏の活動をみていく。

同記事において「我が国のコッコジが，日本の影響をうけていたのは事実，日本から逆輸入した状態で，内容的に独創性が欠如されていることは否認出来ない。日本のものだけまねをすることがもどかしくて，美しい花に我固有の精神を入れ込んで創造してみようという決心で，5 年間苦労した結晶が，『韓国コッコジの歴史』発刊」と述べ，「今（1975 年）になって，コッコジはその活動度も多様化され，家庭用だけはなく舞台装飾や庭園など，屋外進出で幅を広めている。しかし今わが固有のコッコジを発展させ，我々のものとして土着化させたい。」と述べている。

また，「コッコジは，単純に花を器にさす行為だけではない。花の美しさに個人の教養と人の品格を入れる，一つの芸術を生むように創作する心が重要」という。また子らへの優しい環境つくりに役立つとも言う。

以上の記事から，高霞水のコッコジが「上流層の社交」というよりも，「内的な研究が忠実に結実」するものをめざしたことがわかる。事実として，同氏はコッコジの学問的研究を志し，コッ

コジ史に関連する研究や著作も多い。いっぽうコッコジを「日本から逆輸入した」ものであると指摘していることも，見逃せない。さらに「わが固有のコッコジを発展させ」，韓国独自の文化に育てたいという考えであった。当初，いけ花とコッコジの差異は問題にされなかった。むしろ実際の内容はともかく，状況的にはコッコジ＝（イコール）いけ花であったと言って過言ではない。

しかし同氏の言説から，いけ花の影響を認めつつも韓国独自のものにするという，強い意志が感じられる。実際に近年の著作である『韓国伝統花藝：思想と歴史』ハス出版社　2006年，『韓国꽃꽂이歴史』民俗院　2011年，『하수꽃꽂이（高霞水コッコジ作品集）1958～2011』民俗院　2012年は，同氏のコッコジ研究の集大成ともいえる大著である。

## Ⅳ　おわりに

コッコジは，いけ花を習得したことのある韓国（朝鮮）人女性により始められた。それゆえ少なくとも草創期のコッコジはいけ花であった。『女苑』の嶋元恵美子の講座からは，コッコジと言いながらも，日本人によるいけ花という内容の企画が有効なものとしてあったことがわかる。しかしそれは，反日感情を強く持つ側の世論が許さなかったといえよう。

植民地期朝鮮の学校では，朝鮮人は日本人としての生活を余儀なくされたが，家に帰れば朝鮮人としての暮らしがあった[30]。学校内では日本語の使用しか許されなかったが，日本人と朝鮮人の居住区は異なり，日本人との会話は学校外では全くと言っていいほどなく，日本人の生活は見聞きする程度であった。いけ花も選ばれた少女のみが通うことができる高等女学校でわずかに行われていたにすぎない。このような中で，コッコジを牽引した両者は，日本人に近い位置にいたことが履歴からわかる。

いっぽう韓国人女性への聞き取り調査[31]から，以下のような証言を得た。1960年前後に 駐日韓国外交官夫人が，日本で草月流を習得し帰国した。その外交官宅のお隣に住んでいて，近所の人たちと一緒にいけ花を習った。そこでは，戦後の日本の復興の様子を聞きながら，草月流のいけ花を習ったという。子どものころ，日本の女子専門学校に留学経験のある母親が読む日本の女性雑誌で見聞きしていた，いけ花というものがどのようなものであるか，やってみたかったので習った。また当時，戦後の日本がどのようになっているかを知りたかったともいう。数年してその外交官が南米チリへ赴任したため，やめることになった。その後，高等女学校時代の友人5～6人でグループを作り，任華公氏のコッコジを習った。任華公氏に習おうと思った理由は，同氏はそのころすでにコッコジで名を成し，また高等女学校の先輩だったからという。

かつての宗主国日本ならびにその文化に対する拒絶と，それとは裏腹に宗主国という上位にあった存在への畏怖を伴う憧れ，自らの民族が持つものとは異質なものへの興味が，民族としての生活が以前に戻ったからといって簡単に消え去ることはなく，いけ花は，コッコジと名を変えてまで行われ，流行したのではないだろうか。

日本語で話すこと，物事を考えることを余儀なくされた韓国（朝鮮）の女性たちは，否定しきれない日本人として生きたアイデンティティを，コッコジと名を変えたいけ花をすることで満たしたのではないか。ここから，コッコジ草創期にみる日本人観とは，日本人女性はいけ花

をするものである，ということと考える。

しかしここで問題にすべきことがある。このコッコジと名を変えた日本のいけ花は，それが朝鮮（韓国）の人々にどこまで理解されていたのかと，疑問に思うことが多いのである。例えば，草創期のコッコジの教授者は女性のみである。またその受容対象も女性である。それは植民地期朝鮮の朝鮮人に，いけ花は女性の嗜みと教えられたためと考える。しかし，日本のいけ花の歴史において実際には男性の嗜みでもあった[32)]。さらに教授者（師匠）はむしろ男性であることも多かった。

また，いけ花の場合通常，数年学んだ程度で教授はできない。家元制度があり，家元や師匠のお許しも必要である。しかしコッコジの場合は，数年のいけ花の習得でコッコジ講座を担当している。その講座内容も，日本のいけ花を習得したことを履歴に書きながら，独自の観点を以って行うもので，型（形）の継承もない。

このようにコッコジ草創期にみる日本人観の内実は，民族の相違という壁により，同床異夢のものであったと考えられる。

**（付記）**

本稿は 2013 年 12 月マイグレーション研究会（同志社大学），2016 年 2 月国際日本文化研究センター共同研究会（松田班）（日文研）における報告を基にしている。両会においてご教示をくださった先生方に深くお礼を申しあげる。特に国際日本文化研究センター教授松田利彦氏には，資料調査をはじめとして植民地朝鮮研究に関する多くのことでご教示，ご配慮をいただいた。また貴重なお話を聞かせてくださった任華公先生，高霞水先生，韓国現地調査・通訳・翻訳等については金仙花さん（博士・京都大学），柳壽仁さん（華公会・慶雲会）のご尽力，ご協力を得た，記して深謝する。

本稿は追手門学院大学「特色ある研究奨励費」を使用した研究である。

**注**

1）帝国日本の植民地支配から解放されたことをいう。

2）以下，いけ花については，小林善帆「いけ花史試論」前編・後編『いけ花文化研究』創刊号・第 2 号（国際いけ花学会　2013，2014 年）を参照されたい。

3）コッコジは，「華藝」ともいわれる。

4）コッコジ（꽂꽂이）とは韓国語で，花を挿すという意味。

5）韓國園藝學會，韓國花藝デザイン學會，韓國コッ藝術學會ほか。

6）小林善帆『「花」の成立と展開』（和泉書院　2007 年），386 頁

7）日本の統治期間は，1910 年 8 月韓国併合から 1945 年 8 月 15 日天皇「戦争終結」の詔書の放送まで。植民地朝鮮における高等女学校教育は，高等女学校令（勅令第 31 号，1899 年）に準ずるものであった。

8）小林善帆「近代女子教育における茶の湯　―植民地朝鮮の女学校・高等女学校の事例をふまえて」『女性研究者による茶文化研究論文集』茶文化研究発表会実行委員会（茶学の会内）2013 年

9）前掲注 8 小林善帆「近代女子教育における茶の湯　―植民地朝鮮の女学校・高等女学校の事例をふまえて」，小林善帆「植民地朝鮮の女学校・高等女学校といけ花・茶の湯・礼儀作法　―植民地台湾との相互参照を加えて」『日本研究』第 47 集　国際日本文化研究センター　2013 年

10）『女苑』は，1955 年創刊された月刊女性総合雑誌。発行人は金益達，発行は学園社（1956 年から女苑

社)。料理やコッコジなどの講習会を開催し,女性たちの共感を得た。1970年4月号(第175号)で廃刊。

11)『새가정(新家庭)』は,1954年1月に創刊したキリスト教系月刊女性雑誌。発行人は金春培。発行は大韓基督教書会の中の새가정社。同誌のコッコジに関する記事は,1964年に始まる。大韓基督教書会とは,1890年キリスト教書籍の出版や販売及び普及を目的にして設立した超教派的連合事業団体で,1890年6月長老宣教会とメソジスト宣教会が連合して作った朝鮮聖教書会が起源である。韓国の主要キリスト教派には長老教,メソジスト教,浸礼教,聖潔教,ルーテル教,大韓聖公会などがある。

12)『女苑』に関する論文は何本もあるが,そこにコッコジについての考察,言及は見当たらず,コッコジ自体に関する論文も見当たらない。

13)植民地期に朝鮮で生まれ,京城(現,ソウル)の国民学校を卒業,高等女学校4年で終戦となり日本に帰国。京都府立京都第一高等女学校に編入,卒業。結婚後,読売新聞社に勤める夫のソウル駐在で韓国に渡り,『女苑』コッコジ講座を担当した。(『女苑』1962年4月号,315頁による。)

14)金仁順:1966年,韓国コッコジ協会創立,同会初代会長。研美会主宰。

15)初出は『女苑』1959年4月号,1960年6月号においても使用している。

16)『女苑』1960年9月号,342頁

17)任華公:京畿高等女学校卒業,1941～1943年に池坊を学ぶ。高霞水:日本京都外国語短期大学卒業(馬山高等女学校卒業),池坊,草月流入門。

嶋元恵美子:京都府立第一高等女学校卒業,池坊,草月流入門。嶋元恵美子の履歴については,『女苑』1962年4月号掲載分に,4年まで「京畿高等女学校」に在学したとあるが,卒業生の証言から当時そのような日本人が同校に在籍した事実はないといい,さらに同校は韓国人の通う学校であったため,日本人の通うトップ校であった京城公立第一高等女学校(戦後廃校)の誤記と考える。また嶋元の場合,戦争終結時の高等女学校4年まで京城(現在のソウル)で暮らし,日本に帰国後,高等女学校卒業後にいけ花を学んだという。結婚後,読売新聞社勤務の夫のソウルへの転勤に従い,再び韓国に住むことになった。

18)しかし蔚山大学校教授魯成煥氏からのご教示によれば,1960年ころから近年まで,日本の東北地方で韓国人大学教員と結婚した日本人女性が,その夫の帰国にともない韓国大邱(テグ)に住み,小原流のいけ花を教えたが,同地の人々に非常に人気を博していたという。

19)高霞水(Ⅲ.2.参照)により,「コッコジが上流層の社交」と指摘されるのは,このようなことを指すのであろう。

20)高霞水は参加したが,任華公は参加しなかった。以後も任華公は,いずれの協会にも参加せず,独自の道を歩み続けたという。

21)韓国コッコジ協会第6代理事長(1981～1983年)。1981年,韓国コッコジ協会東京支部・釜山及び嶺南支部・湖南支部開設。

22)任華公女史への聞き取り調査は,2010年12月(於ソウル鐘路,華公会会館),2012年2月(於ソウル華公苑,同近隣レストラン)において行った。両調査ともに同行者,柳壽仁(華公会)氏。

また,任華公『華藝』(主婦の友社　1979年)に掲載された「著者略歴」を参考にした。

23)京畿高等女学校は1908年4月,純宗勅命により官立漢城高等女学校として設置された,植民地朝鮮で最も伝統ある,朝鮮人のみを対象とした名門高等女学校であった。

同校については,前掲注9小林善帆「植民地朝鮮の女学校・高等女学校といけ花・茶の湯・礼儀作法―植民地台湾との相互参照を加えて」『日本研究』第47集,213～217頁,小林善帆編『植民地期朝鮮の教育資料』Ⅱ　国際日本文化研究センター発行　2016年,107～180頁に詳しい。

24)東洋蘭とは,東アジア(主に中国,台湾,日本)で産するシンビジウム系のラン。

25)朴正熙大統領(1917～1979):韓国第5～9代大統領(1963～1979)。1961年,将校団を率いてクーデターに成功。独裁政治のもとで日本との国交再開,ベトナム参戦,経済開発などを推進した。

26)朴正熙大統領は,造園ならびに草木花に関して造詣が深い人物であったという(山本浄邦氏の談話に

よる）。

27）任華公の，1980 年代から 1990 年代，主婦の友社からの出版物に『華藝』『華藝百人輯』Ⅰ～Ⅴ，『華藝』Ⅰ～Ⅲなどの作品集がある。

28）小林善帆「いけ花史試論」後編『いけ花文化研究』第 2 号（国際いけ花学会　2014 年），13 頁

29）高霞水女史への聞き取り調査は，2015 年 8 月ソウル，高霞水会館において行った。同行者，金仙花氏（博士（人間・環境学）・京都大学）。この聞き取り調査に先駆けて 2015 年 5 月，高霞水氏への事前調査説明（於ソウル高霞水会館）を金仙花氏にお願いした。8 月の聞き取り調査に至るまでの一連の金仙花氏のご尽力を記して深謝する。

30）前掲注 9 小林善帆「植民地朝鮮の女学校・高等女学校といけ花・茶の湯・礼儀作法　―植民地台湾との相互参照を加えて」『日本研究』第 47 集，216 頁

31）2016 年 2 月・同年 3 月，於ソウルロッテホテルロビー，韓一食堂・同ビルコーヒーショップ。

32）植民地期朝鮮で，いけ花が男性の嗜みでもあることは，全く知らされなかったわけではない。京畿公立中学校（朝鮮人対象の男子中等教育の名門校）では，文化祭の園芸部の展示に，いけ花も展示されている（小林善帆編『植民地期朝鮮の教育資料』Ⅰ国際日本文化研究センター発行　2015 年，10 頁）。